臨床医が読む、行う、費用効果分析-学校検尿の費用効果分析を通して-

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科
本多貴実子

【抄録】

人口の高齢化と医療の高度化により医療保健財源が逼迫する中、どのような医療技術にどのくらい資源を分配することが妥当なのか。様々な議論が考えられる中で、一つの判断材料となるのが医療経済評価である。医療経済評価とは新規介入を既存のものと比較し、「どれほど費用を新たに投入すれば、どれほどの効果が新たに得られるか」という費用対効果を分析するものである。日本では医薬品や医療機器の価格制度に医療経済評価が導入、制度化されているが、診断や治療戦略、スクリーニングや予防接種などの公衆衛生政策、社会的支援政策など、どのような介入についても評価対象となり得る。

医療経済評価は基本的にはメゾ・マクロレベルでの意思決定にエビデンスを供するものであり、現場の医療者にはまだなじみが薄いと思われる。しかしどのような医療的介入にもそのための資源配分が必要となる。価値ある介入に適切に医療資源が配分されるには、現場の医療者がその価値を適切に評価し、行政、社会に訴えていく必要がある。

筆者は小児科/腎臓病専門医として大学や小児専門病院で診療を行っていたが、現在は医療経済評価を専門に研究、人材育成にあたっている。臨床疫学とは異なる用語や手法が多い医療経済評価は、論文の理解や実際の分析実施に困難を感じる医療者も多い。本セッションでは医療経済評価の基本事項や論文読解のポイントを解説し、筆者が実施した学校腎臓病検診の費用効果分析（Honda, et al. JAMA Netw Open. 2024;7(2):e2356412）を紹介する。臨床現場の先生方が医療経済評価に興味をお持ちいただくきっかけになれば幸いである。